

書評 第一

隈元忠敬著『フイヒテ「全知識学の基礎」の研究』
 (まえがき二頁。目次五頁。本文三二七頁。文献、人名・用語索引十三頁。溪水社、昭和六十一年刊。)

長澤邦彦

本書すなわち隈元忠敬氏の『フイヒテ「全知識学の基礎」の研究』は、古来哲学者にとって必読難解の書と言われたフイヒテ前期の名著『全知識学の基礎』全篇にわたる詳細綿密なる研究書である。フイヒテの『基礎』は従来カントからシュering、ヘーゲルへの過渡的な位置づけを与えられてきた。それがフイヒテ生誕二百年の一九六二年以来のいわゆるフイヒテ・ルネサンスを通じて後期フイヒテ像が明らかにされ、フイヒテ哲学独自の意義が強調された。わが国においてもその間、優れた本格的な二つのフイヒテ研究書、即ち本書の著者隈元氏の『フイヒテ知識学の研究』(協同出版、昭和四五年刊)や大峰頭氏の『フイヒテ研究』(創文社、昭和五一年刊)が著わされている。しかし本書において著者は、『全知識学の基礎』のみを取りあげ、そしてその全篇を詳細に検討し、カントやヘーゲルに還元されないフイヒテ知識学の特性を明らかにしようとする。著者隈元忠敬

氏は、一九八五年ドイツに先だって我国に創設された日本フイヒテ協会の会長として、またミュンヘンのラウト教授との交流や国際フイヒテ学会への参加等を通じて、名実共に我国を代表するフイヒテ研究者として知られている。本書はその著者の、フイヒテ研究史上に先例のない『全知識学の基礎』全篇にわたる詳細なる研究書である。なお同著者には本書とほぼ同時期に出版された、『全知識学の基礎』の新訳と一八一〇年の『知識学梗概』の訳とを併録した『フイヒテ全知識学の基礎・知識学梗概』(溪水社、昭和六一年刊)がある。

さて本書における著者のフイヒテ解釈上の主要な観点は次の二点である。まず第一に自我と絶対者とを未分の形で含んでいる絶対我を知識学の全体像から明らかにしようとする点である。そして第二には、フイヒテの自覚は自我の自由を基軸にして存在と連関しており、存在の意識として存在と自我との「表裏構造」において捉えられるべきものであり、そしてそれはカントやヘーゲルに還元され得ぬフイヒテ知識学の特性を示しているという点である。このような観点から為される著者の『フイヒテ「全知識学の基礎」の研究』は次のような構成となっている。

- 第一章 フイヒテ知識学の基礎構造
- 第二章 三原則の構造
- 第三章 理論的知識学
- 第四章 実践的知識学
- 第五章 フイヒテ後期への展望

第一章は著者のフィヒテ知識学に対する基本的見解、第二章、第三章、第四章は『基礎』の各篇にわたる綿密周到な考察、そして第五章は後期知識学における「光」ならびに「存在」の解明となっている。以下順を追って本書の内容の概略を紹介する。(本小論中、フィヒテの訳語はすべて本書において著者自身が使用しているものを採用する。)

一

本書冒頭において著者は、フィヒテとカント、ラインホルト、ヤコービとの比較考察を簡潔に試みた後、フィヒテ知識学の根本性格をヘーゲル弁証法との対比において「対立の統一」と特色づける。ヘーゲルの『差異論文』のフィヒテ批判以来、フィヒテ知識学における当為の立場は真の統一に達せざる不完全なる総合の立場とされてきた。これに対して著者は、フィヒテ知識学の特徴を「制限的弁証法」とするW・ヤンケ、「総合的積極的弁証法」とするK・ハンマッハー、「実践的・動的総合」とする木村素衛の見解を紹介批評した後、自らのフィヒテ解釈を「対立のままの統一」、「無限と有限との対立による統一」、「実践的努力の中で対立の統一」として示し、この観点を次のようにまとめる。「フィヒテにおいては、一方、自我と非自我との対立は統一の中に単に止揚され消滅されるのではなくて、むしろ対立は統一においてはじめてその対立たるの真相に至るとともに、他方、統一は対立を単に宥和させるのではなくて、むしろ対立があるが故にこそ統一の実を得るとき構造をもつ。

対立と統一は単に相反する自我の働きではなくて、むしろ同時に相表裏する底のものである。こうして著者は「フィヒテ弁証法」の構造を「対立の統一」と名づけるのである。(三八頁)

このようにフィヒテ知識学を、対立と統一とが「相表裏する」ところの「対立の統一」としての「弁証法」と捉える点が、著者の全篇を貫く基本的な見解である。以下この基本的観点から『基礎』の各部門が、つまり三原則、理論的部門、実践的部門がそれぞれ詳細に検討されるわけである。その際著者は著者独自の展開を急ぐことなく、フィヒテの叙述に即してあくまでもフィヒテを離れずフィヒテと共に歩む姿勢を貫ぬいている。したがって読者も著者と共にフィヒテ自身の思索の深みに自ら参入することを求められる。以下において、本書第一章とそれ以後の各章とにおける著者の『基礎』三部門にわたる見解を、それぞれ各部門ごとにまとめて紹介する。

著者はまず三原則の体系を「対立の統一」として捉え、特に第一原則は体系原理として「対立の統一」の原型を包蔵していると考え、第一原則の絶対我を単に絶対者と見ることを拒否する。フィヒテ自身の事行の表現、「自我は端的にある、すなわち自我はあるが故に端的にあり、自我は自我があるところのもので端的にある。両者は自我に対して。」において自我の能动性は「故に」と「もの」との対立をもち、両者が対自的に自覚態において統一されている。著者はこれが以後の「対立の統一」の「原型」であると言う。事行我は働くものであると同時に

に働きの産物であるが、著者によれば、そこで両者は「対立の故にこそ不可分」なのである。自我は主観と客観との同一性であるが、それについても著者は、「対立のままに」、「対立するが故に」合一するのであるとし、それは主客を媒介する第三者による総合ではなく、実は両者の対立そのものが、両者の統一と「相表裏」していると言うのである。(四一頁)そこに働く自我は、万物を無から創造し支配する絶対者ではなく、万物創造の理、万物の発生を洞見するものであると言う。

フィヒテは三原則を正立・反立・総合として捉えているが、その総合は可分性の概念への「下降」であり、反立と「相互補全」の関係にあり、正立は反立と総合との「表裏構造」の根底にあつて両者を可能にしている。総合は「対立の止揚」ではなくて、「対立の裏面」である。自我と非我とが「反立すること」が真に総合されるゆえん(四三頁)なのである。絶対我は完結した絶対者ではなく、対立を通じて自らを完成していくのであり、実践においては自我の努力の源泉であり、かつ追求されるべき理念である。「対立の統一」の真意は、単に対立するものが統一されているというのではなく、「対立の根底にすでにあるところの統一」(四四頁)が、「対立の場に対立を通じて」みずからを現わすという点にあるのである。このような基本的観点から、第二章においては三原則の構造が、知識学における不可避の循環、事実と事行の相異、定立と存在と自覚との連関、自我の自己定立と非我の反立の可分性による総合等を通じて具体的に説明される。

理論的部門に関しては、フィヒテの知識学が、(一)観念論・實在論・批判的観念論、(二)質的と量的、(三)限定と交互限定、(四)自覚、という四つの主導的モチーフの連関により解明される。知識学の批判的量的観念論としての立場は「独立的能動性」と「交互的能動受動」との関連ならびに「作用性」と「実体性」との対比を軸にして明らかにされる。自我と非我とは独断的質的な対立としてではなく、實在性の量の相異として捉えられ、その関係の内に自我の自覚が自らを現わす。著者によれば、それは「対立の統一」において、「対立の根底にある統一」が自らを現わすことなのである。(四七頁)

かくして第三章においては、第三原則中に含まれる二命題の一つ「自我は自己自身を、非我によって制限されたものとして定立する」という理論的知識学の原則の分析の結果、非我による自我の限定と自我の自己限定とを得、そこから自我の實在性と非我の否定性との交互限定が説かれる。自我と非我とは両者がみず別々に存在していて、あとから関係するのではなく、「自我はみずからの裏面に常に非我を伴っている。両者は表裏の関係にある。」(四〇頁)とされる。そして自我の受動と非我の實在性との関連から「作用性」が、自我の限定・被限定に関し自我の定量の能動性から「実体性」が得られる。この作用性と実体性との関連と、さらに「独立的能動性」と「交互的能動受動」との相互連関を通じて、哲学上の諸々の立場が位置づけられ、最終的に「総括」と「会通」Zusammenreifen との

「構想力」による総合に至り、「批判的量的観念論」としての知識学の立場に達する。構想力は、対立する自我と非我とを「対立のままに包んで」、それを自我の無限性と限局との「表裏構造」の上に基礎づける。ここにおいて實在論と観念論とは単に相異なる系列ではなくて、むしろ「相補うべき表と裏」であり、自我の全一的活動の二側面なのである。(一九六頁) このようにして展開される理論的部門各段階における分析総合の全過程を逐一紹介することはできないが、ここに見られるフィヒテ自身の強靱なる思索を追遂し再構成する著者の綿密精緻な考察は、まさに長年フィヒテと共に歩まれた著者ならではの力量を示して余りあるものである。

実践的部門においては、(一)絶対我ー無限性ー自己内還帰の能動性、(二)知性我ー有限性ー客観的能動性、(三)客観ー非我ー客観の能動性という三つのモメントが指摘され、その連関の内に自我の努力の真相が解明される。客観が定立されるかぎり、無限我の能動性と対象の能動性とは端的に等しくあるべきである。自我がこの要求にもとづいて客観にかかわる仕方が「努力」である。したがって努力がなければ客観はないのである。この努力とは自我の無限性と客観とを「対立のままに合一する弁証法の統一」(五四頁)である。動的緊張的対立の中にあって合一が成り立つ。これまた「対立の統一」である。ところで自我は努力すると共に、努力するものとして自己を知らなくてはならない。それは自我の能動性の阻止と回復とを

通じて自己同一性を保持しようとする「自我の自知」であり、「対立の統一の自覚」である。そして著者は、「自我における対立の統一は結局のところ自我の自知の要求に基礎づけられている」(五六頁)と云うのである。自我の本質は無限を満たそうとする努力であり、その根底には絶対我の理念がある。この絶対我の自己実現と自我の努力とは「相表裏し、対立の統一」をなしている。フィヒテの自我の根本構造を示す「対立の統一」は、ヘーゲル弁証法における「対立の統一」とは厳密に区別されなければならない。フィヒテ弁証法は「べし」の体系であり、「宥和的な統一ではなくてむしろ対立的統一」であり「対立するが故に統一がなされる」のである(五九頁)と著者は言う。

このような基本的見解にしたがって第四章においては、実践的原則中の知性我と絶対我との「主要反立」Hauptantitheseから出発し、自我の非我に対する因果性の課題を経て、非我反立の真相を探究し、自我の純粹能動性と客観的能動性との因果関係を介して自我の客観への因果性を解明する。自我の純粹能動性は可能的客観への関係においては努力として現われる。努力なくして客観はない。自我の内に一つの不等性・制限が現われ、自我の自同性と抗争する。自我の能動性の阻止と回復とは、「相表裏する」相互性として「それ自体においてすでに」総合的に合一されている。(三三四頁)さらに自我の無限的客観的能動性と有限的客観的能動性とが、それぞれ現実的客観と理想的客観への関係において明らかにされ、ついには無限と有限との対立が「当為」・「努力」の概念によって解決される。自我の本

質は「無限な努力」であり、自我の自己定立は「有限と相表裏する無限」であり、反立と「相即」するものなのである。(二三八頁) 努力とは無限我と客観とを「対立のままに合一する弁証法的統一」であり、自我と客観との動的対立の内に「かえって両者の合一するゆえんがある」のであり、これ即ち「対立の統一」である。(二三九頁) この対立の統一の根底には自我の「自知の要求」があるのであり、有限と無限との緊張関係はこの自我の自知の要求にもとづくのである。(二四一頁)

上述の努力の「間接的」*anagogisch* な論証に対してフィヒテはさらに、努力の「発生的」*genetisch* な演繹を試み、自我の「外出」*Herausgehen* の根拠を示そうとする。自我に対する他からの影響の可能性の制約は、自我自身の内に基礎づけられなくてはならず、自我自身の内に基礎的な差異が存在しなければならぬ。自我の内なるこの異種的なものは、フィヒテによれば自我の能動性の「方向の差異」である。(二四五頁) 自我の能動性はその方向において「遠心的」と「求心的」との二つを持つ。自我の無限の能動性が障害されて自己自身の内へ追い返され、ここに反省が成り立つ。この反省における能動性の方向の転回に際して、自我の無限性への要求を尺度として二方向が区別されるのである。自我の自己定立と反省性とが非自我の働きかけを可能ならしめる制約である。「自我は根源的に自己自身との交互作用に立つことによって、外からの影響を可能にするのである。」(二五一頁)

こうして絶対我と知性我との主要反立の総合をめざして努力

の概念に至り、さらにこの努力の概念を発生的に、外出の概念の追求を通じて導来し、ここに絶対我と知性我と実践我との合一点が、絶対我を根底とする知性我と実践我との「有機的関係」として示される。第四章における著者の考察は、前著『フィヒテ知識学の研究』以後の研究成果であろうか、前著書と較べて格段の進展が見られる。それは例えば「無限に外へ向う能動性のこの方向」(二四六頁)や「第三者」(二四八頁)や自我の「外」(二五一頁)等に関する考察等随処に見られる。特に第三節以下の「衝動の演繹」や「憧憬」に関する考察は前著書には全くなかったものであり、注目に値する。その考察を通じて、有限と無限とを合一する実践的努力に対応する自我の内的な力として、一方で無限に連なり、他方で有限に関わるという「衝動」の本性が明らかにされる。自我の絶対性と努力の無限性とは「相表裏」し、前者によって後者をはじめて可能となり、逆に後者によってはじめて絶対我は自らを自覚し得るのである。かくして著者は両者の関係を「対立の統一の典型」(二八八頁)と見なしている。

第五章においてはフィヒテ後期への展望が、一八〇一年の絶対知の「光」、一八〇四年の「真理論」・「現象論」、一八〇六年の「存在の意識」、一八一〇年の「映像」・「図式」、一八一二年の「可視性」・「見照」をめぐって簡潔に語られている。特に存在と意識との関連をめぐって、知識学が存在と意識とのそれぞれ

の自知・自覚として「相即」構造をなしていることが示され

る。存在がみずから意識することと、意識が存在を意識することとが「相表裏」するところに、後期知識学における存在と意識との連関の特性が存するのである。「存在は意識を通じてはじめて存在たるゆえんが実るのであり、逆に意識は存在にかかわるときにはじめてみずからの真理にめざめるのである。」(三五頁)

以上が本書の第一章から第五章にわたる著者の『基礎』全篇にわたる考察の概略である。次に若干の感想を述べて批評にかえたいと思う。

二

論すべき点が多いが、今は部分的な問題はすべて省略して、全篇にわたる基本的な問題のみを取りあげよう。

まず理論的部門における「独立的能動性」と「交互的能動受動」との相互連関から「構想力」による統一に至る過程についてである。いやしくもフィヒテ知識学を論ずる者で、自我の定立・非我の反立・両者の可分性による総合という三原則、ならびに実践的部門における努力・当為の立場をそれなりに理解せぬ者はないと思われるが、初学者がよく「フィヒテは難解である」と言うのは、上述の理論的部門におけるフィヒテの煩瑣な思索についていけぬという点にあるようである。それはこの簡処における問題の所在を適確に把握せぬからだと思われる。ここで重要なのは、その出発点における、非我による自我の限定と自我の自己限定とに關係する自我の実在性と非我の否定性と

の相互連関の問題である。本来自我には全実在性が属し、その限り非我には全否定性が属する。とすれば逆に自我に否定性が、非我に実在性が属すということはいかなることなのであろうか。この問題の困難さを捉えておかねば、この簡処におけるフィヒテの思索の意義を理解することはできない。その困難な課題に対する解答の基礎となるのが、第三原則における「量可能性」の概念であり、これが理論的部門における質的から量的への移行、実在論と観念論との関連、交互限定等の可能性を開くのである。

本来、自我―実在性―能動性と非我―否定性―受動性との両契機は兩立し得ず相互に相手を否定しあい、相交わるといふことがない。ところが自我と非我とは、まずそれぞれ独立に存在して、それにあるときは実在性が、またあるときは否定性が属するのではないのである。自我とは全実在性としての能動性のことであり、非我とは全否定性としての受動性のことである。そして実在性と否定性、能動と受動との相関が自我と非我との關係なのである。全実在性の総量としての自我に対しては非我は端的に「無」である。両者の間には何らの交渉もなく、そこでは相互限定は不可能である。それが相互に限定可能となるのは、まさに第三原則における「量可能性」の概念による。これにより自我と非我とは質的な対立から量的な対立へと移行し、可分的なる限定が可能となり、非我は「負量」となるのである。そしてこの可分性による限定からそれ以後のすべての交互限定が展開してくるのである。その際重要なのは、まず自我

が實在性の總量、を保持し続けるということと、ならびに實在性の一部分に、交替移行が起るということとである。この両者が同時に起らなければならぬ。即ち絶対我と相對我、實在性の總量と部分量、この二つの観点が同時に働かなくては以後の知識学は展開しないのである。自我もしくは實在性を一方的に、いづれか一つの観点から捉えるならば、知識学の動的展開過程のすべてが理解できなくなる。両者により知識学は展開し、かつそれと共に知識学は兩者の合一をめざすのである。これが著者の言う「対立の統一」の真相でなければならぬし、難解とされる「独立的能動性」と「交互的能動受動」の相互連関以降の展開も、上述の自我およびその實在性それぞれの両面をおさえておかねば理解できなくなってしまうのである。著者は自らの問いを立ててそれにフィヒテをして解答せしめるといふよりは、あくまでもフィヒテの叙述に即して考察を進めようとしているので、その探究のあとを追うに際して、読者は右の点に細心の注意を払いつつ、フィヒテにとつて、著者にとつて、そして読者自らにとつて何が当面の問題なのであるかを明確に把握しつつ前進しなければならない。

次に著者の『基礎』全篇にわたる基本的解釈を示す「対立の統一」による「弁証法」を検討してみよう。まずフィヒテにおける「弁証法」がヘーゲル弁証法と異なるものであることは言うまでもない。本書全篇がヘーゲル流の弁証法に対するフィヒテ知識学の独自の主張である。また「弁証法」という概念が

プラトンからキルケゴールやマルクスにまで及ぶ汎汎な哲学的方法を指示するかぎり、「弁証法」という言葉のみによつてフィヒテ知識学の特徴を示すことはできない。フィヒテ知識学について、ヘーゲル弁証法の意味で弁証法と言うことは著者の意に全く反することであるし、かつまた広義の弁証法なる言葉によつてはフィヒテ知識学の立場は何ら明らかになりはしない。そこでヤンケにしても著者にしても独自の限定詞をつけて「制限的弁証法」(三三頁)とか「対立の統一の弁証法」とか言うわけである。ところが著者は「対立の統一」をヘーゲルにも認めているわけであるから(五九頁)、この「対立の統一」という言葉によつても直ちにフィヒテ知識学の特徴が明示されているとは言えない。したがつて著者の言う「対立の統一」を、單純にフィヒテ解釈上の諸問題に対する著者の解答と見なすことは許されない。我々は著者が「対立の統一」と言う事柄の内実を理解しなければならない。そのためには我々が知識学におけるフィヒテ自身の哲学的思惟を自ら追遂行することが求められる。

「対立の統一」とは著者によれば、ヘーゲルにおけるような「対立の宥和」を意味するのではなく、「対立が対立のままに統一される」ということを意味する。統一は対立を単に宥和させるのではなく、むしろ「対立があるが故にこそ統一の実を得る」(三八頁)のである。このことは以後も「対立のままに」、「対立するが故に合一する」などとして随処に見られる著者の基本的な見解である。

ところで対立はあくまで対立であつて統一ではない。対立が

そのままに統一であるとはどういうことか。二つの項の対立緊張が解消されることなく、そのままに統一であるということなのか。つまり「対立の統一」とは「対立が統一される」ことではなく、「対立が統一である」ということなのであろうか。そうであるとするれば対立はあくまでも対立のままに留まるのであるから、それは対立そのものにとつての統一ではなく、対立を対立の外から統一と捉える者にとつての統一にすぎないのではなからうか。すると既に対立の根底に対立を対立のままに統一と捉えることを可能にするような統一的な或物がなければならぬこととなる。なるほど著者も「対立の根底にすでにあるところの統一」(四四頁)について語っている。ところがしかしこの対立の根底にある統一は、「根底にすでにある」とは言うものの、対立の外に静止的に存立しているものではなく、「対立の場に対立を通じてみずから現わす」(四四頁)ものなのである。著者によれば二項の対立そのものが両者の統一を裏づけ、対立と統一とは「相表裏する構造」を持つのである。そしてこの「対立の統一」の根底には絶対自我の自己実現の要求があって、それは「対立の統一」を通じてはじめて自らを展開実現し得るのである。著者が「対立するが故に統一する」というゆえんである。

一面、自我はそれ自体絶対的、無限であるが、他面その自己実現は有限の中における「対立の統一」という形を通じてのみ遂行される。この両面についても著者は「相表裏する」と言っている。このように著者は「対立の統一」について語る際つね

に「相即する」とか「表裏する」とかいう形容を使うのであるが、果してその真意は何であらうか。例えば甲乙二項の相即といえ、甲が甲のままに乙、乙が乙のままに甲といった両者の直接的相互転換、区別なき融合、不二、一体を意味し、甲乙表裏すると言え、甲と乙とは表と裏として区別されながらも不離、一体なることを意味すると思われる。表がなければ裏はなく、裏がなければ表はない。両者一体ではあるが、表が裏であり、裏が表であるといったような相即構造とは違う。さらにまた著者は「表裏する」という言葉を、対立する両項についても、対立と統一との関係についても、そして対立の統一とその根底にある統一との関係についても、同じように用いている。この点、著者の言う「相即構造」・「表裏構造」にはなお解明の余地があると思われる。

フィヒテ知識学の展開過程において各段階での対立が総合さるべきであるのは、対立がそのまま矛盾であるから、というのではなく、対立の存することが第一原則の絶対的同一性と矛盾するという点からくるのである。そして知識学の展開を経てついに実践的部門において、この自我の同一性の要求が実現されるべしという当為の立場へと収斂していくのである。それは「対立の統一」を通じての自我の自己実現であり、同時に自我の自覚の深化なのである。「対立の統一」は「対立の統一の自覚」を離れてはあり得ない。したがって知識学において「表裏構造」と言っても、それは単なる表裏構造そのものを指すだけではなく、この表裏構造の表裏相即性の自覚自知のことなので

ある。それ故このような自覚自知の立場に自ら身を置くことなしに、即ち知識学におけるフィヒテの思惟そのものに参入することなしに、著者の言うフィヒテ解釈上の鍵概念である「対立の統一」の「弁証法」ならびに「表裏構造」を單純に安易な解答と受けとるならば、知識学の眞の精神を見失うことになる。そうならぬために我々は著者の言う「対立の統一」という言葉ではなく、その意味するところを十分に理解する必要があるし、それにはフィヒテ自身の思索を自ら追遂行しなければならぬのである。我々がそのような姿勢をもって本書に取りくむときはじめ、本書における著者の意図も報われるであらう。

世界のフィヒテ研究史上にその例を見ない『全知識学の基礎』全篇にわたる著者の綿密周到な考察を展開する本書は、長年フィヒテと共に哲学の道を行ってきた著者畢生の労作として、今後長く我國のフィヒテ研究者にとって必読の書となることであらう。

(一九八七年三月記。)

(筆者 ながさわ・くにひこ 同志社大学文学部「哲学」教授)

書評 第二

小川侃著『現象のロゴス——構造論的現象学の試み』(本文、一三〇頁。プロ・ロゴス、目次、エピ・ロゴス、一一頁。註、文献表、人名・事項索引、二六頁。勁草書房、昭和六十一年刊。)

野村直正

現象学は今日に至るまで様々な出会いを通し、その比類ない可能性を示してきた。その中でも、構造論的思惟との出会いは、多元的現象を統一的に把握する稔り豊かな視点を開いた点で注目に値するが、この出会いから、現象学自身が何を受け取り展開させて行くかは、今後の課題である。

本書において、著者は自らの現象学的立場を「構造論的現出理論」と規定する。「現象学と構造論的思惟とをもっとも原初的にまた徹底的に統合すること」(iv)、これが本書の根本的企図である。著者は現象学の地平性の概念と構造理論の体系的性の概念とを共に思惟し、現出性の次元を構造論的思惟によって解明し、規定し直そうとする。現出体系の地平性に着目した「関連性の現象学」が、本書において著者が自らに課す課題である。その際著者は、ロゴスを「言葉と構造との両義性」(v)において